

幼児と遊ぶ「劇あそび」 ～指導者の役割と実践シナリオⅢ～

佐藤 厚
Sato Atsushi

キーワード：劇あそび・body for self・body for others・活かし合う・リズムバリエーション・
クリエイティヴムーヴメント

はじめに

ハーロック (E.B Hurlock) 「児童の発達心理学」の、'遊びの何が (子どもの) 健全育成に役立つか' では、「子どもの遊びは、子どもの生活そのものであり、遊びの中に子どもを成長・発達させる重要な要素がある。その多くは他の方法 (教授→学習) では、得られないものである」とある。

そもそも、遊びは自由な活動であり他人に強制されず、自らを求める活動である。そして、それは自発的、能動的、発散的である。

ホイジンガ (J.Huizinga) の遊びの定義

ホイジンガは、その著書『ホモ・ルーデンス』(1938) (注1) において、遊び概念と人間、そして文化の関係を考察している。ホイジンガは、「遊び」概念を次のように定義している。

「遊びとは、あるはっきり定められた時間、空間の範囲内で行われる自発的な行為もしくは活動である。それは自発的に受け入れた規則に従っている。その規則はいったん受け入れられた以上は、絶対的拘束力をもっている。遊びの目的は行為そのもののなかにある。それは、緊張と喜びの感情を伴い、またこれは『日常生活』とは『別のもの』という意識に裏づけられている」ホイジンガのこの定義の主要特徴をまとめると、以下に示す5つのものになる。①一つの自由な行動である。命令でもなく、いつでも延期できるし、中止しても何ら差し支えない。②遊びは日常生活から、その場と持続時間とによって区別される。遊びは定められた時間、空間の限界内で行われて、そのなかで終わる。③遊びは緊張の要素が必須である。緊張それは不確実ということ、やってみないことにはわからないということである。④遊びは必要や欲望の直接的満足という過程の外にある。遊びは直接の物質的利害、あるいは生活の必要充足の外におかれている。⑤どんな遊びにも、それに固有の規則がある。

カイヨワ (R.Caillois) の遊びの定義

遊びの概念を次の6つに集約して、次のように箇条書きで定義している。(注2) ①自由な活動。すなわち、遊技者が強制されないこと。もし強制されれば、遊びはたちまち魅力的な愉快な楽しみという性質を失ってしまう。②隔離された活動。すなわち、あらかじめ決められた明確な空間と時間の範囲内に制限されていること。③未確定の活動。すなわち、ゲーム展開が決定されていたり、先に結果が分かっていたりしてはならない。創意の必要があるのだから、ある種の自由が必ず、遊技者の側に残されていなければならない。④非生産的の活動。すなわち、財産も富も、いかなる種類の新要素も作り出さないこと。遊戯者間での所有権の移動をのぞいて、勝負開始時と同じ状態に帰着する。⑤規則のある活動。すなわち、約束ごとに従う活動。この約束ごとは通常法規を停止し、一時的に新しい法を確立する。そしてこの法だけが通用する。⑥虚構の活動。すなわち、日常生活と対比した場合、二次的な現実、または明白に非現実であるという特殊な意識を伴っていること。

日本における遊びという言葉

『日本芸能六講』(折口信夫・著)によると、あそびという言葉は日本のかなり古い時代から使われていて言葉であり、昔は鎮魂(魂を鎮める)の動作を意味するものとされている。春の祭りには、尉じょうと姥うばが主役となって、これから1年の稲作を演ずる神事劇舞わぎおぎを「田あそび」と言って、今でも各地に伝承されている民族芸能として見ることができる。これは、豊作を神に祈願すると同時に、人々が1年の稲作の手順を演じ、かつ、見ることによって再確認し、仕事に手抜かりのないように決意を新たにするためのものであったろうと言われている。子どもにとっての遊びとは、昔の人の田あそびと同じく、祈りであり願いであり、学習であり、内なる心と外なる行動とが同時に働く充実した体験である。それは、他から強制されやらされることなく、自ら心のおもむくままに、自己を発揮し表現する行動であって、神霊の魂鎮めとともに自らの心の充足感をも得た古代人の心境と子どもの遊び心理とは相通じるものがあるように思われる。

こうした、自由闊達な子どもの遊びの中であって劇遊びのような表現活動を通じた教育をするということは、表現の経験を繰り返すことによって、自己表現への勇気と自信を育て、主体的な内面活動を活性化しようとするものである。

内面の形成から表現活動へ

イギリスの心理学者ヒートン(Heaton)は人間関係における自分自身の存在をbody for selfとbody for othersの2つに区別している。(早坂泰次郎「人間関係の心理学」講談社より) body for selfとは「主体としての自分」であり自分で考え、自分で判断し、自分の責任において行動する自分である。それは自発的で柔軟で、思いあがらず、他者に対して心を開き誠実で、自然体である。対して、body for othersは「他者にとっての自分」である。世間体や、周りの目を気にし「格好悪くないように」「親や先生に気に入られる様に」など、絶えず周

困からの物差しを気にして自分を律しようとする生き方となる。他人にはほめられることが好きだが、自己の内面をさらけ出せず、心を許して付き合えない。「body for self」と「body for others」どちらかと言えば、前者のほうが理想的に見え後者は不必要のように感じるが、現在の日本の教育が後者の方向で子どもを他律化する傾向が多いからである。「body for self」と「body for others」のバランスを保ちながら教育され、内面が形成されていくことが望ましいのである。

自己表現とは、自分自身の内面に深く根ざしている。故に、他者から言われて、ただ表面的にまねるのではなく、内面に受け入れたイメージを土台に、こうしてみたい、こうありたいという意欲を具体的なものとして外へ表すのが表現活動である。ことに、幼児の生活の中で表現する力を育てるということは、日常の人間関係での相手の心の読み取りや、相手に対する意思伝達を大切にすることであって、それが「表現」の最終的な目標である。音楽表現、造形表現、劇的表現などを教えることに目的があるのではなく、日常の人間関係の中で豊かな表現力をもって、自ら心豊かな人生を送る能力を育てようとすることである。

本実践シナリオは、前述のハーロックの「遊び」の定義や、ホイジンガ (J.Huizinga) やカイヨワ (R.Caillois) の遊びの定義また、日本における「あそび」という言葉の起源を踏まえ、「劇あそび」の実践活動を通じて作成したものである。

日本民話「三枚のお札」より

本シナリオは、劇遊びの実践記録を基に作成されている。シナリオ中「——」で示されている部分は、子どもたちと指導者との間で進行中交わされる会話表現の中で、主に数多く交わされる基本ラインの会話を載せているので、実際に行う場合は、この限りではない。指導者は、様々なまた突発的な子どもたちの反応に、順応しながら進行することである。

- ・ 準備物：木魚・トライアングル・シンバル・打楽器系のもの等
ピアノ（各場面に合ったリズム曲があることが望ましい）
- ・ 対象：4～6歳児
- ・ 場所：プレイルーム・保育室

※注 C.M：Creative Movement
R.V：Rhythm Variation
T：指導者
子：子どもたち

これから三枚のお札のお話をします。

お話をよく聞いて、お話に出てくる色々な役のまねをしたり、思いついたことを言いながら、楽しんでいきましょう。

そうそう、お話に出てくる「大きな火」ってあるんだけど、どんな火かなあ。(C.M:Piano 火)

<一人から集団で活動>

それから、「大きな水」もあるけど…。(C.M:Piano 水)

<一人から集団で活動>

それでは、お話を始めましょう。

昔あるところに、山寺がありました。

山寺って知ってる？——知ってるう。

誰が住んでるの？——和尚さん、小僧さん！

そうだね。いつも、和尚さんたちは何をしてるのかな？——お掃除。お経読んでる。

では、みんなでやってみましょう。(お掃除やお経読む活動)

※ここからは、セリフのまねをさせたり、どう反応するかを見定めながら進行する。繰り返し
言わせる部分と、時に指導者が、片方の役になって子どもたちからの言葉を待つ部分もある。
セリフを全部言わせるのではなく、ポイントになるところを言わせ、できるだけ子どもたち
から言葉を引き出す雰囲気を作る。

すると和尚さんが、小僧さんと呼んで言いました。

T：小僧さん、小僧さん。お願いがあります。

子：なんですか、和尚さん。(何々？などの反応あり)

T：そろそろ、お彼岸なので、裏山へ行ってお花を摘んで来てくれないかね？

小僧さんは、「はい、かしこまりました。」といました。

みんな言えるかな？——言えるよー。

子：はい、かしこまりました。

T：沢山の花があって、楽しいかもしれないけど、夕方遅くならないうちに帰ってくのじゃぞ。

遅くなると、山姥が出るからな。たのんだよ。いってらっしゃい。

子：はい！いってきます。

T：ああ、これこれ、もし山姥出るといけない。そのために、このお札を持って行きなさい。

願い事を聞いてくれるお札じゃからな。

そう言って、和尚さんは、小僧さんに3枚のお札を渡しました。(マイムで表現する)

T：気をつけてな。

子：はい！

そう言うと、小僧さんは元気いっぱいに（スキップして）出かけて行きました。(Piano R.V)
裏山に着くと、沢山のお花が咲いていました。小僧さんは、色々な色のお花を摘み始めました。

※無対象の活動だが、ここまでの火や水の身体表現、掃除や読経、お札を渡すマイム、などを
通じて子どもたちにも見えないものが見え、自信を持って活動できるようにする。そして、
近くの友達どうし、先生たちに、「見えないお花」を見せ合ってみる。

するとそこに、おばあさんがやってきました。おばあさんは、小僧さんに言いました。

T：小僧さん、ちょっとお願いがあるんだけど…。

皆もおばあさんに変身！おばあさんになって言うてみて。

子：小僧さん、ちょっとお願いがあるんだけど…。

T：もうすぐお彼岸になるので、亡くなったおじいさんにお経を読んであげてほしいんだけど
ねえ。

お経をあまりよく知らない小僧さんは、

T：お経…ですか… と言いました。(促すように)

子：お経…ですか…

T：あまりよくわかんないけど、おばあさんのお願いじゃあ、ことわれないしなあ。

心のやさしい小僧さんは、どうしたと思う？——読んであげる。

じゃあ、なんて言うてあげようか？——いいよー、読んであげる、など。

そう言って、おばあさんの家へ行ってあげることにしました。おばあさんの家は、山の上の方
です。ゆっくり、ゆっくり登っていきます。(Piano R.V)

※二人組になって、小僧さんがおばあさんを手伝ってあげる活動など。じゃんけんで役を決め、
途中で交代する。

やっと、おばあさんの家へ着きました。小僧さんは、早速仏壇の前に座ると、お経を読み始めました。

お経、言える人いるかな？

※いる場合は、皆で真似してみる。でたらめでも良い。人前でやる試みや勇気が大切。

例) ナンマイダ、ナンマイダ…よくわからないけど、ナンマイダ。おしまいだあ ちーん！終わりました。

※子どもたちが付いてこれるくらいの速さで。木魚、トライアングル等で効果を出す。

おばあさんは、

T：ありがとうございます。さあさ、これをおあがり。

言えるかな？

子：ありがとうございます。さあさ、これをおあがり。

と言って、おまんじゅうやら団子やらをたくさん出してくれました。小僧さんは、

T：うわーっ、いっただきまーす！（子どもたちも一緒に言えるタイミングで）

パクパク、むごむご…ごちそうさまでした。

でもそのあと、おなかいっぱいになった小僧さんは、眠くなって寝てしまいました。

「ZZZZ…」(子どもたちも寝る)

ふと眼を覚ますと、何やら音がしています。

「シュッ！シュッ！…」(子どもたちも一緒になるまで何回か続ける)

何の音かと、隣の部屋をのぞいてみると、山姥が包丁を研いでいる音でした。

頭には大きな角が二本、

どんな角だと思う？——こんなの、ジャキーン！など。身体表現や擬音を出しながら表現。

髪の毛はバサバサ——バサバサ！

大きな口は耳まで裂けています。プウウ～！——プウウ～！

こわくなった小僧さんは、おもわず、

T：あっ！

子：あっ！

と声を出してしまいました。山姥は、ギロツとにらむと

T：み～た～な～！

子：み～た～な～！

そして、あっという間に小僧さんを、ひもでぐるぐる巻きにしてみました。

T：グルグルグルのキュッ（ひもで巻いてしまうマイム）

みんなも一緒に…

子：グルグルグルのキュッ

T：たすけてえ～

子：たすけてえ～

山姥は、

T：だめだ！

子：だめだ！

何とかして逃げる方法を考えた小僧さんは、

T：おらあ、便所に行きてえ

言える？

子：おらあ、便所に行きてえ（このあたりから、子どもたちは小僧役を多くやり始める）

T：だめだ！

T：あ～がまんできねえ、もれるう

子：あ～がまんできねえ、もれるう

すると山姥は、

T：しょうがない、早く行け。逃げるなよ！

便所に行った小僧さんは、どうにかひもをほどくと、便所の柱にひもを縛ってお札を貼り、
※ゆっくりと、子どもたちが真似しやすいようにマイムで表現する。

T：おらの代わりに、まあだ、まあだと言って下さい。パンパン、お願いします。

子：パンパン、お願いします。

そして、そーっと逃げました。(Piano R.V) 山姥が、

T：小僧まだか？

と言うと、柱が、「まあだ、まあだ！」と言いました。

T：さあ、みんなで…

子：まあだ、まあだ！

山姥がまた「小僧まだか？」と言うと、

子：まあだ、まあだ！

T：まだか？

子：まあだ、まあだ！

「え～い、遅いわ！」と言って、ひもをぐいと引っ張ると、便所が「ドンガラリン！」

子：ドンガラリン！

と壊れてしまいました。(Piano 壊音)

T：小僧、逃げたなあ！！待てーっ！（Piano R.V）

ものすごい勢いで小僧さんを追いかけてきました。

T：ま～て～！

※このあたりは、本気の追いかけてこになるが、途中から、その場駆け足のようにすると子どもたちも表現しやすくなる。

追いつかれそうになった小僧さんは、お札を出して、

T：大きな水、出ろ！（Piano 水音）

子：大きな水、出ろ！

<一人から集団で大水が流れる様子や大波を身体表現>

大水に流されそうになった山姥は、その水を

T：カバ～ッ！

子：ガバ～ッ！

と全部飲みほしてしまいました。そしてまた小僧さんを追いかけてきます。

T：ま～て～っ！！」（Piano R.V）

小僧さんは、またお札を出して、

T：大きな火、出ろ！（Piano 火）

子：大きな火、出ろ！

<一人から集団で大きな火の身体表現>

大きな火で、髪の毛がチリチリになりながら、山姥はさっき飲みほした大水を

T：ドバ〜ッ！

子：ドバ〜ッ！

とプチまくと火は、シュ〜と消えてしまいました。

子：シュ〜

山姥はまたまた、追いかけてきます。

※お札三枚で解決しなくてもよい。逆境を乗り越えるべく色々な、お札の活動「雷・壁・光線
銃・怪獣・風・竜巻、コチョコチョ…など」をする。子どもたちから色々なアイデアが出
やすいように、はじめは先生方からの提案があるとよい。歌、ダンスなどで山姥を楽しみに
巻き込んでしまうことも可能。しかし、なかなか手ごわい山姥であってほしい。

やっとのことで、山寺に戻ってきた小僧さんは、

T：和尚さ〜ん！

子：和尚さ〜ん！

和尚さんは、あわてることなく「ここへ、隠れておれ。」小僧さんは、押し入れに隠れました。
(隠れるマイム)

そこへ、山姥がやってきて、「こら、和尚。小僧はどこだ！隠すと、お前も食っちゃうぞ！」
すると和尚さん、

T：まあ、餅でも食わんか？

子：まあ、餅でも食わんか？

はらべこ山姥は、「お、うまそうだな。」そう言って、餅を食べ始めた。

※山姥になって餅を食べるマイムをしても良い。この後は、山姥になったり、和尚さんになっ
たり、両方のキャラクターを楽しめるように。

和尚さんは、山姥に聞いた。

T：お前さんは、大きなものに化けられるかのう？

子：お前さんは、大きなものに化けられるかのう？

T：そんなもん、わけないわ。

子：そんなもん、わけないわ。

山姥は、みるみる大きな大入道に化けた。(Piano 大入道)

T：どうだあ、和尚！！(大入道のイメージがわくマイムで)

子：どうだあ、和尚！！

和尚さんは、

T：おお、すごいすごい。

子：おお、すごいすごい。

T：こんどは、小さなものには、化けられるかのう？

子：こんどは、小さなものには、化けられるかのう？

T：ふん、わけないわ。

子：ふん、わけないわ。

そういうと、あっという間に、小さな豆粒になった。(Piano 小)

T：ドウダ、オショウウ…

子：ドウダ、オショウウ…

すると和尚さんは、持っていた餅に、その豆をポンとはさむと

T・子(一緒に)：もぐもぐもぐ、ああ、うまかった。

と食べてしまいました。

こうして、和尚さんと小僧さんは、山寺で平和に暮らしましたとさ。

とっぴんばらりのぶう。 お話は、これで、

T・子(一緒に)：お・し・ま・い。

【主な実践場所】

- ・ 上田女子短期大学 幼児教育学科
- ・ 上田女子短期大学附属幼稚園
- ・ 聖徳大学 児童学部
- ・ 学校法人清和学園 郡山敬愛幼稚園
- ・ 社会福祉法人 こどもの園敬愛保育園
- ・ 劇団ひまわり 幼稚部

【参考文献】

- 岡田陽・著『子どもの表現活動』玉川大学出版部（1994年）
早坂泰次郎・著『人間関係の心理学』講談社（1979年）
折口信夫・著『日本芸能史六講』講談社学術文庫（1991年）

注1) J. ホイジンガ著、高橋英夫訳『ホモ・ルーデンス』中公文庫、1973年（Johan Huizinga, *Homo Ludens :A study of the play element in culture*, New York : Harper & Row 1939 (1970))

注2) R. カイヨワ著、多田道太郎、塚崎幹夫訳『遊びと人間』講談社学術文庫、1990年（Roger Caillois, *Les Jeux et les Hommes (Le masque et le vertige)*, edition revue et augmentee. imard,1967)